『夜嵐阿衣花廼仇夢』論序説

――成立と趣向を中心に――

佐々木　亨

明治五年二月二十日原田阿衣は刑場の露と消えた。阿衣は高利貸し小林金平の妾であったが、役者の嵐璃鶴と密通し邪魔になった金平を毒殺したためである。その高札は創刊間もない「東京日日新聞」に掲載され、この記事に基づく新聞錦絵も後に登場した。これ等の資料の存在に関しては後掲の如く既に指摘がある。更に処刑から六年を経た明治十一年二月の『鳥追阿松海上新話』（以下『阿松』と称す）の成功に倣い、岡本勘造が中絶した連載を草双紙化し『夜嵐阿衣花廼仇夢』（以下『阿衣』と称す）と題して同年六月届けで金松堂から刊行した。翌年二月には高橋阿伝に取材する草双紙の烈しい競作が行われ、明治期草双紙の流行を決定付けることになる。ここに阿松・阿衣・阿伝という三大毒婦が揃い踏みするに至る。この三人の中で最も影が薄いと思われるのが阿衣である。『阿松』と『高橋阿伝夜刃譚』（以下『阿伝』と称す）の場合、今日容易に活字本が入手でき、また明治初頭の出版文化史という視点からも避けては通れない存在となっている。それ等に較べると『阿衣』はその氏前か書名を挙げるに止まり、内容にまで言及されることが少ない。

試みに大正末から昭和初頭刊の明治文学名著全集を見てみよう。『阿伝』は単独で一冊を占め、『阿松』もまた一冊を与えられるのに対し、『阿衣』はその付録として付け足しの扱いとなっている。[1] その理由として以下の要因が考えられる。『阿松』『阿伝』ともに絶対的なヒロインとして各々の毒婦が設定されているのに対して、『阿衣』の方は毒婦による縦横無尽な活躍という趣向に対し、より多くの筆を費やされている今一つの趣向がある。これを踏まえつつ毒婦ものという基準に載せようとすると印象の弱さは否めなくなる。それゆえ毒婦もの的要素で括りきれない部分は、評価の対象から外されていた。しかしこれでは偏った評価しか与えられないことになる。本稿はこの漏れ落ちた部分を俎上に載せ評価の対象とすることを目的とする。加えて『阿衣』の成立過程と作者の問題も併せて扱う。なお、阿衣を阿絹、金平を金兵衛等と表記しているものも多いが、ここでは草双紙に倣って阿衣、金平としてある。

一

『阿衣』が毒婦ものとしての側面を殊更強調され始めたのはいつ頃のことであろうか。先程も名を挙げた三人の毒婦、即ち阿松・阿衣・阿伝が揃い踏みされるようになった時点とそれは一致している。各々接近した時間の中で草双紙の主人公とされ、その草双紙がヒットした事実から明らかなように、その当時から一応並び称されてはいた。既に『阿伝』八編下巻八丁ウラの挿絵には、中央に文箱が並べられ『阿松』と『阿衣』が各々両端に配されているという事実もある。ただし『阿松』が空前のヒットを飛ばして金字塔を打ち立て、後続がその体裁を範としたように、『阿伝』もまたそのヒットにあやかろうとする意図も存在する。また『阿衣』の方は『阿伝』と版元が同一の金松堂であり、広告の意味も読みとれよう。従って厳密な意味で三大毒婦として揃い踏みさせたとはいいかねるのである。その前後にも、例えばお滝の如く、複数の毒婦が草双紙化されているし、本間久雄氏が『明治文学史　上巻』（昭和10年、東京堂）で指摘する如く五人あるいは七人と並べられている錦絵もある。また明治十九年十二月刊の『新編明治毒婦伝』（鈴木金次郎編、金泉堂刊）には、阿松・阿衣・阿伝の他お滝・お新・お辰の六名を並べている。これらが取捨選択され、結局三大毒婦として定着された時期が存在するはずである。

阿衣の時代から半世紀を経た大正末に、江戸から明治にかけての膨大な書籍が関東大震災により一瞬にして烏有に帰した。その現実を目の当たりにした知識人たちによって、それらを掘り起こし保存しようとする気運が高まり、例えば明治文化研究が組織的に推進される。その一方で谷崎潤一郎による明治末以来の一連の著作が悪魔主義と称され、マゾやフェチに対する人々の関心を次第に高め、変態という名を冠した書物も流行するようになった。これを承けるが如く、大正末から昭和初頭に東京堂から刊行された明治文学の翻刻にあの毒婦たちも名を連ねることとなった。昭和二年「早稲田文学」十月号の見返し広告は象徴的な存在である。明治文学名著全集の中からわざわざ毒婦物二冊のみを採り上げている。同誌九十六～七頁間に挿入された広告には、既刊の全十一冊が紹介されているにもかかわらずにである。第五巻『阿伝』、第十巻『阿松』と『阿衣』、以上三作の書名が囲み付きで大きく記され（見返し広告では全集名や巻数を一切示していない）、その右側には以下の如き広告文が綴られている。

明治草双紙の毒婦物三傑作！　仮名垣魯文の「高橋阿伝夜刃譚」が、明治初期毒婦物の代表作の一つとして、所謂「似而非悪魔主義」を露骨に発揮してゐるのに対して、久保田彦作の「鳥追お松海上新話」は流麗な文章と、筋の運びの無理のない点で文学的に最も優れた価値を示してゐる。「夜嵐お衣花廼仇夢」は、毒婦原田お絹と当時の人気俳優嵐璃鶴（後の河原崎権十郎）との恋愛事件を中心として残虐無道な毒婦の典型を描破した実説的興味の多いものである。いづれも挿画は原本によつて多数複刻収載してある。（引用に際し、明らかな誤植は訂正した）

同誌同年四月号の広告には『阿松』・『阿衣』に先立つ大正十五年刊行の『阿伝』のみが掲載され、「明治初年の混沌蕪雑な社会相」を伝え「お伝の多淫、多情、残忍、強欲な変態的性格」が露骨に描かれ、「当時の草双紙丈けが持つ、あの似而非（シュード）・悪魔主義（ダイアボリズム）の不可解な魅力」を湛えているとする。

谷崎の『痴人の愛』が単行本化されたのは大正十四年のことでもあり、これまでの毒婦物的な著作に続いて男に膝を屈せしむる女性が話題を集めていた。谷崎に限らずそれまでにも毒婦に心寄せる文化人もいたとは思うが、大震災後間もなく明治の毒婦が復活したのは事実なのである。広告の文章は校訂者である本間久雄氏に拠るものと思われる。同氏は時を同じくして、早稲田文学特輯号「明治文学研究号」第一において「似而非悪魔主義――所謂毒婦物の考察――」を著しており、これは翌年刊の前掲明治文学名著全集『阿伝』の解説「明治初期毒婦物の考察」へと転用された。両者は同一ではあるが、結論部分が前者において芸術的に風格なしと禁欲的であったものを、後者では文化史的に興味ある対象と評価する姿勢に改めている。注目すべき点として、毒婦出現理由を階級差別と皮相的な開化に求めていることが挙げられよう。同時に勧善懲悪が悪魔主義の十分なる発揮を妨げており、「似而非悪魔主義（シュードダイアボリズム）」に終わっているという本間氏らしい指摘もなされている。というのも同氏はこの二年前に『唯美主義者オスカア・ワイルド』を著しており、ダイアボリズムなる用語の源泉もこのあたりに求められよう。この論文を継承発展させたのが『明治文学史　上巻』の「開化期小説」なる一章の「毒婦物」の項目で、「毒婦三種――阿松、阿絹、阿伝――」と並べ、前述の二冊で揃い踏みさせた三名をそのまま挙げている。以下阿衣に関係するところのみ拾うと、草双紙の簡単な解題に続き、初編序にある、「魁新聞」連載が好評につきすぐ単行本化した旨を指摘し、梗概を掲げている。次に阿衣の相手が芸能人であったという点を強調し、加えて殺人の有無とその原因という視点から三人の毒婦に落差を設定している。続いて当時の世相が毒婦を歓迎していたこと、その原因として幕末維新期の血なまぐさい世相と歌舞伎における白波ものの流行を挙げ、草双紙の挿絵が持つ猥褻及び残忍性と結びついていると指摘している。

以上より三大毒婦確定には本間氏の与っている可能性が大きく、なおかつ毒婦への関心も漸く研究へと向かい始めた。従って出発点として氏の功績は記憶されるべきものではあるが、以後の毒婦評価をボードレールの言辞を借りれば「いまはしき物に魅力を見出」（『悪の華』鈴木信太郎訳）す方向へと結果として導いてしまったし、『阿衣』もまた毒婦ものの代表として堂々と並べられてしまったのである。

二

『阿衣』そのものを分析する前に、その草双紙化されるまでに登場した幾つかの媒体について少しく検討しておく。報道の嚆矢は阿衣の処刑を伝える「東京日日新聞」の雑報記事であった。その全文は既に本田康雄氏の『新聞小説の誕生』（平成10年、平凡社）に紹介されている。「捨札ノ写」に続き、晒された期間を報

じ、嵐璃鶴の処置は次号掲載とする。続けて「評者云」とあり、その美貌を西施や迦陵頻伽になぞらえつつ内面夜叉たる存在であることを印象付ける。一方、璃鶴も美少年ゆえ遊びが過ぎた結果であり自業自得とする。そして芭蕉の発句「蛇くふと……」で結ぶ。この記事に対して「語り手の把握が付されていて、それ自身物語的な要素を指摘できる」という山田俊治氏の見解が示されている。[2] 歴史とは畢竟解釈の産物であるという見地からすれば、そういうことになるのであろう。私が関心を持つのは、記事に見られる如上の記述態度がどのような流れのもとに位置しているかという点である。

近世期から明治初頭にかけて大衆に事件を報じてくれる存在は、いうまでもなく瓦版である。瓦版は幕末頃の名称とされ、絵双紙や読売という名称の方が古い。ここでは読売という名称で示しておく。読売は天変地異や戦争といった関心の高い社会的事件の他にも、敵討や殺人などを扱うものも頗る多い。敵討の一例を見てみよう。具体的な本文紹介は本稿では割愛するが、幕末刊と思しき「姉ハ十九 妹ハ十六 丹波の国敵討」なる一枚ものがある。[3] そこでは過去に遡って時制を現在形にしながら発端が語られる。そして殺人が起き、遺族の辛酸が紹介され、幾多の苦難を経て結局目出度く本懐を遂げるまでが報じられる。最後に大評判の敵討ゆえその大略を記したと結ばれる。これもまた山田氏の見解に拠れば物語的な認識ということになるのであろうが、読売の記述と雑報記事との連続性にむしろ注目したい。あの「読売新聞」が新聞名をそうしているのは、当然読売（瓦版）の読者を強奪しようという目論見があったからである。阿衣の雑報も、読売で扱ってきた事件と同質の性格を有しており記事も読売風にしたのであろう。

ここで読売の読者と新聞（特に小新聞）の読者は一致するのかという疑問を想定し得る。刊行の不定期と定期、木版と活版による字体の違いという形式上の差異が両者間にはある。刊行の間隔の問題においては、毎日やってくる売り子の手にする情報媒体が、昨日とは全く異なっている新しい内容を有しているという認識が買い手の側に定着される必要がある。創刊間もない「読売新聞」（明治七年十一月二日）に次のような投書が見られる。

> 此ごろ窓下を読うりが、是はこのたびと売りあるきますゆゑ、また例のくだらないものかとぞんじましたが、手にもつておるのを見ますと、新ぶんめいたものでありますから、どんなものかとぞんじ買つて見ますと……（ルビは必要最低限に止め、句読点を適宜補った。以下全ての作品本文の引用も同様）

この読者は読売を下らないもの、新聞はためになるものと峻別している風ではあるが、読売を購入していたからこそこのような認識に至ったはずである。小新聞が大衆を相手にする以上読売の読者と競合しないとは考えられない。読売の販売方法である呼び売りを敢えてぶつけること、それは一見非効率的に見えながらも、その戦略こそが読売より豊かな情報を載せていることを結局確実に理解させる名案であった。確かに新聞は読売よりは高価であり、そのために購入を躊躇する者も多かったと推定される。読売の場合は興味ひかれる口上の時のみ購入すれば事足りた。しかし新聞も縦覧所や茶店で閲覧可能なのである。また活版と木版の問

題に関しては、連載と草双紙を並べてみるとよいと思う。連載「鳥追ひ阿松の伝」の完結を期待する多くの読者が、草双紙『阿松』へと流れていき空前のヒットを飛ばした。活版の字体も木版の字体も苦にしていなかった証となるであろう。前田愛氏は明治十年末に売り子の禁止が命ぜられると「小新聞は瓦版的な性格をあらためて、定期刊行物としての性格を鮮明に」（『近代読者の成立』昭和48年、有精堂）したとし、その結果つづきものが成長したとの見解を示している。つづきものの成長の要因は他にも考えるべきであるが、小新聞と読売との関係に言い及んだ数少ない見解である。

阿衣が再び登場するのが山田氏も指摘する如く新聞錦絵である。「東京日々新聞」と題され明治七年七月に登場した新聞錦絵は、瞬時に脚光を浴びた。タイトルが示す如く「日日新聞」の記事を基にして錦絵を描き、その余白を解説で埋めるのである。阿衣の掲載は第三号と記載されたものである。既に翻字もなされているので一節のみ引用する。

……曇なき身も恋ゆへに狂ふ意の駒形町、舟板塀に竹格子、好風な住居の外妾は、原田於絹と呼ばれたる弦妓あがりの淫婦、手折れ易き路傍の花に嵐の璃鶴とて、美少年なる俳優と兼て姦通なしたりしが……

山田氏による「日日新聞」の記事との比較は以下の如くである。

五七音を基調にした韻律を利かせて、よりレトリカルな文体で書かれ、首尾対応する話を持った詞書は、夏姿の男女の涼み図の背後に、石見銀山売を配した錦絵とともに、明らかに〈物語〉として享受されたであろう。

確かに韻律を踏み、掛詞を多用する文体ではある。ただこれが物語として享受されていたと断ずるにはやはり躊躇いを覚える。このような文章表現は読売でも御馴染みである。物語という用語の巧みな流用はむしろ混乱を来す。読売は物語ではないと思うし、読者もまた物語として享受していた訳でもないのではないか。氏が指摘した如く「日日新聞」に較べれば「よりレトリカル」ではあるが、両者では時間差が二年ほどあり、しかも「日日新聞」の方は活字不足で窮々としていた紙面を象徴していると興津要氏が『新聞雑誌発生事情』（昭和58年、角川書店）で指摘したしろものである。質的な比較以前の問題がある。また錦絵の意匠に関しても山田氏は物語としている。これはたとえば吉田漱氏による「普通の錦絵とほとんどかわらない。……夏姿の男女の涼み図という伝統的な浮世絵風の図柄」という指摘[4]と対立している。物語たる所以は毒薬売りが描かれているからで、これで殺すのかなどと想像することは確かに可能であろう。ここで錦絵の一例を挙げて検証してみる。例えば「忠臣蔵」七段目をモチーフにした歌麿作がそれで、団扇を持ち胸を肌蹴た美人が右に描かれ中央の柱に寄り掛かり、左側には上半身を顕にした色男が居て書簡を読むという、やや危な絵風のものである[5]。縁の下には猫が描かれ、手紙を盗み読む九太夫をもじっている。この縁の下の存在を銀山売りへと見立てたとも考えられよう。直接これに拠っていると断ずるつもりはないが、やはり挿絵は物語というより錦絵の系統に立つものとして受容されていたと思う。

「東京日々新聞」第一号と題された新聞錦絵は、阿衣処刑と同年に起きた信州の破戒僧による後家殺し事件が選定されている。そこには後家の喉もとを踏みにじり、血汐に染まった出刃包丁で止めを刺そうとする悪僧が描かれている。残忍な殺伐とした挿絵は、読者の注意を強く喚起したことであろう。ここで想起されるのがやはり敵討に取材した読売である。これに伴う挿絵は、十中八九敵が討ち果たされ血汐を噴き出す場面なのである。新聞錦絵の第一号と題したものにもまた、やはり流血する意匠が選定されたことは偶然の一致ではあるまい。ここでも読売の読者を奪ってこようという戦略が見て取れるのである。物語化によって歴史は形成されるという分析もそれなりに魅力的な解釈であり、読売の時代から既にそうであるということになるのかもしれないが、読売と新聞との非連続性のみならず、その連続性を内面も含めて考察する必要がある。

山田氏は「日日新聞」から新聞錦絵へと物語化が深まったとの立場から「その延長上で、虚構の出来事を趣向として取り込んで物語を長編化したとき」『阿衣』という草双紙が誕生したとする。しかし『阿衣』は五編十五冊もの多大な分量に及んでいる。これほどのものが「その延長上」に成立するというのは些か飛躍があるのではないか。後述の如く阿衣以外の人物達が活躍する場面も実は多いのである。極言してしまえば事件報道から草双紙として成立したものということになるが、草双紙の不振と復興に揺れる明治十一年という時代背景を抜きにしては作品の成立を厳密に語ることはできない。

阿衣の事件は時間とともに物語化が増幅されたという指摘は結果としては正しい。処刑が「日日新聞」の創刊と重なり雑報記事とされ、これをリメイクした新聞錦絵の「日々新聞」が続いた。人気役者とのスキャンダルという商品価値のある事件性に加えて、新聞錦絵という視覚的にも印象を残すメディアに載り記憶を新たにさせる。明治十年には嵐璃鶴の舞台再開もあり、「俳優の市川権十郎（前名嵐璃鶴）ハ諏訪町河岸のお絹一件で長々の懲役……団十郎の周旋で再び舞台へ帰り」（「かなよみ」4月5日）という記事にも見られる如く、阿衣の記憶は復活する契機を得るに至る。阿伝の場合は処刑直後から連載が始まるが、三年遡った明治九年九月十二日「仮名読新聞」に殺人事件の概要が一紙面の全面を越える分量で報じられており、物語化の準備は既になされ処刑を待っていたということが判る。阿伝は阿衣以上の資格保持者なのである。しかし明治十年の西南戦争時は戦報記事に埋め尽くされてしまう。戦争の続報記事が漸く先細りする同年末になると、初の長物語である「鳥追ひお松の伝」が「かなよみ」に連載される。阿松の死は戦争勃発とほぼ同じ二月上旬のことである。阿松もまた何がしかの企画が予定されていたが戦争報道のため順延され続けたと思われ、これもまた堂々たる有資格者である。しかしこの長物語は連載としては必ずしも成功を収めたとは言い難く、[6] 後半部分は単行本へ回された。この草双紙体裁の単行本が、前年続々と刊行された西南戦争ものの草双紙の存在を承けて空前の大ヒットを遂げる。ライバルの書肆にとって、阿松に対抗する主人公の発掘が急務となる。阿伝はまだ公判中ゆえ禁じ手である。そ

こで担ぎ出されたのが阿衣であった。

三

前述の如く『阿衣』は「魁新聞」の連載に続いてものされたものである。両者の関係は、中絶した連載を基にして単行本化に及んだと単純に考察しているものが多い。しかし新聞の現物を誰も確認することができず、単行本初編序の記述に頼っているに過ぎない。両者の関係は今少し慎重な分析がなされなければならない。この考察に先立ち『阿衣』五編の梗概を以下に掲げる。これによっても本作における複数の趣向が明らかとなるはずである。

（初編）江戸の薬種問屋のあるじ紀の国屋角太郎は避暑へ向かう途中、病に苦しむ呉服屋の娘お八重を救うが、八重は失踪する。また投宿中の阿衣を見かける。やがて阿衣は角太郎の隣に転居する。角太郎の下女の姪お吉が八重と出会い、義父の横恋慕に悩む八重を角太郎の許に伴い、角太郎と八重は理無き仲となる。角太郎を我がものにせんと企む阿衣は、太鼓医者の玄達と下男甚八を用い、八重を亡き者とする。

（二編）阿衣は角太郎の友人三崎勇次郎を通じて縁談を申し入れ、妾として庇護を受けていた大名家と絶縁する。結婚後阿衣は八重の幽霊に苛まれ、角太郎は八重に瓜二つの芸者小久に惹かれてゆく。玄達は密かに八重を救出したが靡かないので、妾奉公に出す支度を始める。

（三編）髪結のお吉が呼ばれ、八重は危機を告げる。一方阿衣は勇次郎と深い仲になってゆく。お吉は妾奉公先とも親しく事前に事情を伝えていたので、玄達は懲らしめられる。お吉は八重を伴い角太郎を訪ねるべく小久の許へ行く。そこで二人が姉妹たりしことが明かされる。角太郎は身ごもる八重をいたわり阿衣との決別を誓う。金品を持ち出し勇次郎の許へ通う阿衣に対して角太郎が意見をするので、阿衣は殺意を抱く。

（四編）角太郎の毒殺には失敗するが、阿衣は離縁され勇次郎と一緒になる。角太郎はお吉と番頭四郎吉との仲を許し、小久に家を持たせる。また小久の義父の行方不明だった実子が四郎吉であったことも判る。そして八重は男子を産む。上野戦争が始まり勇次郎は戦死、阿衣も無一文となり芸者稼業を始める。高利貸しとして成功していた玄達改め小林金平と再会し妾となる。やがて嵐璃鶴と出会い理無き仲となる。

（五編）金平は阿衣を疑い、打擲し散切にする。阿衣は璃鶴の心を繋ぎ止め、金平の毒殺に成功し、その財を奪わんとするも訴える者ありて捕縛され自白に至る。璃鶴も舞台上で拘束される。阿衣は出産を終え璃鶴との最期の別れを許された後斬罪に処された。

以上の如く阿衣は初編から登場するものの、四編途中まで角太郎と八重、そして阿衣の三角関係が中心となっている。対して、金平殺しとその原因となった璃鶴との情話は四編後半から漸く描かれ、分量としては一編強に過ぎない。[7] 作品全体として中心的な趣向をどこに求めるべきかという追求に入る前に、連載と単行本の関係についてまず考えておく。

以下初編序文を引用する。なお本文上部に縦書きで「さきが

け」と新聞名を冠している。

我さきがけ新聞第三百廿号（本年五月廿八日）の紙上を以て其発端を説起し、号を遂て連日掲来りし毒婦阿衣の伝ハ、其実録に拠て余が戯れに筆を走らせしに、図らず看客の喝采を蒙り、新紙の発売多を加ふるの栄を得たれど、既に紙上に示せし如く、俳優市川権十郎が嵐璃鶴たりし時、同人を懲役に陥れ其身の厳刑に処せられたる大眼目ハ、只阿衣が末路の一事のみ。其生涯の奸悪を数ふれバ数條の珍説奇説多端に渉り、新聞紙面に悉す能ハざるのみならず、一場の説話も数号に渉るを以て、看客首尾照応を誤るの憾なきにあらねバ、金松堂の主人が乞に応じ半途にして紙上の掲載を止め、岡本子をして之を双紙に綴らせ、爰に初編を発兌せり。題して夜嵐阿衣花廼仇夢といふ。其顚末を記するや、曽て新紙に掲げしものと故らに参差表裏を示すを以て頗る看客の心を楽ましむるものあらん。

明治十一年六月　芳川俊雄記　印

芳川は草双紙では閲という立場で、綴ったのは岡本勘造ということになっている（各編袋、表紙、見返し等に拠る）。ここから実際の作者はどちらかという問題が生ずるがこの点は後述する。序の前半より連載の作者は芳川であり、連載は数日に及んだ如くである。次の一節「俳優市川権十郎が……阿衣が末路の一事のみ」は連載の具体的内容を推定させる意味のある記述となっており、連載は璃鶴の逮捕と阿衣の処刑を中心にしていたことが明らかとなる。とすればその規模はあまり大きなものではなかったと推定されよう。これに続く一節「其生涯の奸悪を……一場の説話も数号に渉る」もそれを裏付けており、長すぎるのを嫌い中絶して単行本化したというのである。阿衣の連載が新聞の発行部数を増やしたと豪語しながらこれを打ち切り単行本化に及ぶということは、当時の芳川は連載の商品価値を未だ認識していないことになる。

紙上においては新聞錦絵にも採られたあの場面、即ち毒殺から逮捕、処刑に至るまでに絞って書上げた原稿を分載した。しかし予想以上の反響があり、もし長く書き延ばしてゆくとすれば、阿衣の新たな肉付けに迫られる。そうなると大団円まで数回に分けようとした方針は変更されねばならない。その煩わしさが「首尾照応を誤るの憾」なのであろう。従って結果として連載から単行本化というコースは辿っているが、連載と単行本とはかなり違ったものであったと推測される。『阿松』は無論書き換えがなされてはいるものの、単行本の約三分の二の分量を連載が占めていた。『阿伝』は書き下ろしというべきものである。『阿衣』は書き下ろしが殆どで連載が残存している程度と思われる。

連載と単行本とではその趣向に大きな相違があることは注意すべき事柄である。そこに作者が芳川俊雄か岡本勘造かという問題を乗せて考えるのも意味があると思われる。従来の見解を紹介すると、石川巌氏は「写実主義以前の文学」（『日本文学講座　明治時代（上）』所収　昭和6年、新潮社）において野崎左文の「芳川春濤翁の伝」（「新旧時代」7月号）にある師弟関係のもと春濤が勘造に作を与え名を譲ったとする説に対して、初編序に連載を中止して勘造に単行本化させたこと、及び勘造筆二編序にある芳川の「仕附」けによって初編を脱稿したが好評につき嗣編に及んだことよ

り、基本的には勘造を作者として、新聞の連載の方と重複する初編の一部のみ芳川の作と考えている。興津要氏もやはり初、二編の序を引きつつ「芳川のアイデアを岡本が執筆したのではないか」（『明治開化期文学集（二）』昭和42年、筑摩書房明治文学全集）と推定する。石川氏は初編序の「半途にして紙上の掲載を止め、岡本子をして之を双紙に綴らせ」を文字通りに解釈してしまっている。即ち「紙上の掲載を止め」た「半途」を、初編冒頭からの何がしかの分量と単純に考えたのである。しかしこの考察は、連載は璃鶴の逮捕と阿衣の処刑を中心にしていたという一節を全く無視してしまっている。芳川が連載において手掛けたのは、草双紙では最終編に当たる部分なのである。前述の如く阿衣の毒婦像が増長され固定化するまで、必ずしも阿衣中心には筋が運ばれてはいない。石川氏も引く二編序を改めて検討する。

……夜半の嵐にあへるてふ衣のやれにし跡をものせよといわれぬ。遮莫（さハれ）まだすぢ繻もそぐわしかねし身の面なき業ながら、たゞよし川うしの仕附芋を便として漸く初編を綴くりしに、僥倖にも後をとの促しありとき、そゞろに編をつぎあてがひ……

石川氏は「よし川うしの仕附芋を便として」を初編における連載に基づく部分と解している。しかしこれは芳川春濤が連載という種を蒔き、新人の勘造がそれを開花させたということを謙遜を交えつつ表明したとすべきである。

好評のうちに二編に至ったのを「僥倖」とするのは謙遜ではない。近世期の作と同様長編というのは結果に過ぎず、人気がなければすぐ打ち切りとなる。初編刊行間もない七月八日「郵便報知」は『阿衣』の創作性を非難しつつその生涯を報じた。[8]『阿衣』にはこの非難を凌ぐだけの人気があったと同時に、この記事はむしろ宣伝になったのかもしれない。二編下巻には「峯・竹次郎の奇遇の物語ハ後編に委細説解れども」とあり、当初は前後編の予定であったことが判る。とすれば三角関係は前編を中心になされ、後半に入るとその弟の人情話も加えつつ、毒婦阿衣の末路へと筋を急いでいったことになる。『阿衣』の届けは初編から三編までが六月になされ、四編の九月とはやや間を置いている。ということは届けをした側は当初三編を予定していたことになる。これは無論『阿松』の体裁を踏襲したものであり、書肆金松堂の目論見であった。ところが勘造の方は前後編の予定で草稿を編んでいた。この齟齬はどう考えたらよいのか。勘造の前後編の草稿を書肆が一編三冊ずつに改変したということになる。二編の口絵には早くも嵐璃鶴と送り者の伊三郎が描かれる。この人物達は四編下巻に漸く登場する。しかも伊三郎は阿衣の下男甚八として登場している段階で、読者は別人物としか考えられまい。これは前後編にする予定であったことと関係している。後編は璃鶴も主要な登場人物なので当然口絵も用意されている。初編の三角関係が予想外の好評であったため、急遽その延長へと路線を変更して編を拡大し、璃鶴の登場は延引とする。しかし口絵は間に合わない。そこで後編の口絵を流用した。前述の如く璃鶴がらみの話は春濤の連載に基づく。しかし三角関係の方は全くの別趣向である。そしてこの別趣向が歓迎された。こちらの方は勘造の手にな

るものと思われる。華々しいデビューを飾った勘造が、春濤に遠慮しつつも自信を深めてゆく姿が序から読みとれる。

初編で同じ六月の届を持つ奥付を備えながら見返しの色彩が異なる複数の例が『東京大学所蔵草双紙目録　五編』（平成13年、青裳堂）に報告されている。後印本の種類の多さこそ嗣編を加える度に摺り直されたのみならず、それ以上に繰り返して摺りを重ねた証である。見返しの彩色が微妙に違うものが何種か存在するということは、初版初刷りがすぐに売り切れたからであろう。『阿松』争奪戦の余波は及んでいたのである。

初・二編と三編以下と同じ中本ながら寸法が四ミリほど異なるという事実も意味がある。これも前掲『草双紙目録』に宮武外骨旧蔵本が初・二編を裁断して三編以下と同じ寸法にしているとの指摘がある。この寸法の違いは何を意味しているか。初編上中下の表紙は楽屋の璃鶴と阿衣、そして金平が配される三枚ものである。細部にわたって描き込まれた当時のもとしては丁寧な仕上げとなっている。戦報錦絵で息を吹き返した錦絵が、そのブームが去った今お得意の役者絵で力を揮った跡が見て取れる。初・二編実は前後編は手の込んだ摺付表紙をも売り物にするという金松堂の戦略がそこにはあった。しかしこの戦略はコストが掛かる。摺付表紙を豪華にしなくても読者はどうやら付いてくる。新人作者が採用した三角関係という永遠の人気テーマが大きく与っていたからである。三編の序には既に五編完結が予告されており、この編から寸法の変更へと向かった理由もここに求められるし、作者の前後編という予定を裏付けているのが、二編までの豪華路線であった。

最終の五編序をまた芳川がものしているのも象徴的である。この最終編こそ芳川が手掛けた連載に直接関わる部分であった。その序には以下の如き一節が見える。

……清きハ昇り濁れるハ。沈む例を勧懲の。基となして今爰に。綴り果たる毒婦の来歴。岡本氏が艶美なる。柳の枝の筆端へ。嗚呼がましくも小生が。花を咲して看客の。興をそへたる所もあれども。ありし叟にハ露たがハず

単純に読めば勘造の原稿に芳川が手直しをしたということになる。しかし「毒婦の来歴」へと趣向が変化したのは、勘造が執筆してきた草双紙へ春濤がものした連載を繋ぎ合わせたからではないのか。「ありし叟にハ露たがハず」とは事実と齟齬を来していないということなのであろうが、連載とそれ程異なっていないとも解せるであろう。以上より草双紙の作者は岡本勘造であり、最終五編の一部が芳川春濤の連載に基づくとしておく。

四

連載は璃鶴との恋の顛末を中心にしていたのに対して、梗概に示した如く単行本の半分以上は三角関係によって展開されている。勘造による三編自序は次の如くに記されている。

元来この物語ハ只二三輩の男女が事蹟をありの侭に記せる全部五編の束縛冊子にて、目先の変ツた趣向もなければ嗚呼つまらねへ本だと我さへ思へり。

駆け出しの勘造にとって、『阿松』と同じ体裁を要求され続ける

プレッシャーが「束縛冊子」なる一語に込められている。それに先立つ一節より、作者自身毒婦阿衣が主人公としてのみ機能する作品を指向したのではないことが判る。確かに阿衣の暗躍へも決して少なくはない記述が割かれてはいる。しかし角太郎とお八重の記述へも劣ることがない分量が割り当てられている。角太郎は、風流を好む裕福な商家の主人でしかも好男子という設定である。そして町娘のお八重は一途に角太郎を慕っている。そこへ大名の妾で、大名亡き後も相応の手当てを受け取る阿衣が割り込んでくる。一見人情本的な三角関係によって話は始まり、全作品の三分の二弱の分量までこのテーマに基づいて成立している。同時期人気を博した「金之助の話説」もまた人情本的人物構成を持っていた。しかも筋の中心は角太郎とお八重の恋物語で、特にお八重のひた向きさが共感を誘うべく描かれ、これを妨げようとするのが阿衣で、完全な悪役である。しかも悪の造形が単純過ぎて弱く、豊かな魅力には欠ける脇役に甘んじていた。加えて「二三輩の男女が事蹟」と自序に記す如く、八重を救ったお吉と番頭四郎吉の馴れ初めにも思わせぶりな記述を及ぼしているし、前述の如く角太郎の弟竹次郎とお峯の奇遇な物語も予告されている。しかし竹次郎の話は登場することなく、この恋物語に代わる今ひとつの趣向が新たに用意された。

それが璃鶴と邂逅するのに先立ち挿入された、彰義隊員三崎勇次郎との悲恋である。勇次郎は角太郎とも知り合いで、阿衣との手切れを仲介する人物が必要でもある。また様々な男を渡り歩くという毒婦像を形成させるのにも一役買っており、筋の繋ぎと主人公の魅力を高めるための端役という評価は否定しない。しかし勇次郎が介在することによって阿衣への共感を高めているという指摘も可能である。上野戦争が勃発し阿衣は家を焼かれ財産を失ってしまう。これが転落の始まりで、かつて顎で使っていた玄達こと小林金平が金貸しとして成功しており、その妾にされてしまう。単に上野戦争の結果阿衣を無一文にすることも可能である。そこへ恋人を奪われるという悲劇を重ねることにより、転落前後の落差を強調している。[9] 江戸の人々にとって上野戦争とは忘れられない大事件であった。なぜなら新政府軍による掌握が確定し、江戸という都市が喪失した瞬間だからである。彰義隊員の遺骸は葬ることを許さず晒されたままだったという。終戦後から七、八年を経た新聞錦絵で彰義隊員の法事を報じたものもあれば、同時期に副頭取の手記を基にした実録も刊行された。さらに『近世紀聞』等の戦記にも採り上げられる。『阿衣』刊行の翌年二月にも高畠藍泉が彰義隊員に取材した連載を開始している。いやむしろ藍泉は『阿衣』にヒントを得て主人公を彰義隊員にしたのかもしれない。彰義隊の記憶は永続せられ、昭和初頭の古老の回想にも登場する。

上野戦争に限らず幕末から維新期という未曾有の激動期の記憶は、取敢えず戦記物という形で武将を中心に作品化され、次いでその戦闘の犠牲者にもスポットが当てられ、つづきものにも登場するに至る。阿衣もまたその中の一人として読者に共感を覚えさせるべく創作されたのである。しかし毒婦に取材した作は間もなく一人立ちしてそれ自身が主要なテーマへと昇格してゆく。以上

の如く草双紙『阿衣』を成立させていたのは、複数の男女による恋物語と維新期の動乱による転落、そして毒婦としての活躍という三趣向である。和田繁二郎氏が毒婦以外の要素を「傍系の物語」（『近代文学創生期の研究』昭和48年、桜楓社）として捉えているのは毒婦物という先入観のためであった。『阿衣』の印象の弱さも複数の趣向に起因するが、本間氏以来の毒婦を強調しすぎた享受態度を省み、当時流行の趣向という点から同作を再評価する必要がある。

注（1）明治文学名著全集第十一篇広告には『阿松』の書名脇に「（附）『阿衣』」とある。

（2）「明治初期新聞雑報の文体」（「国文学研究」百、平2・3）

（3）『かわらばん展』（昭59・10、町田市立博物館）五十三頁に影印が載る。

（4）「報道としての錦絵」（『新聞錦絵』所収　平元・2、板橋区立美術館）

（5）日本名著全集『風俗図絵集』七〇九頁に影印が載る。

（6）十回超の連載に仮名垣魯文も倦み放棄したとの見解は注（3）の拙稿にて示す。

（7）朝倉喬司氏は『毒婦の誕生』（平14・2、洋泉社）において四編の中程までがフィクションで、残りが実際の事件に基づくとしている。

（8）注（7）の書にて同氏が報道の存在を指摘している。

（9）注（7）の書にて同氏は維新の動乱という点に言及し、江戸の生まれである勘造の体験に起因するとの見解を示している。

新刊紹介

中野三敏著

『本道楽』

本書は、江戸文芸の世界、とりわけ板本書誌を専門としてきた著者による、自伝的エッセイ、想い出語りである。昆虫フリークの田舎の坊ンが、いつしか作家を夢見、「早稲田中退」を目指して上京。古書店巡りをスタートする件は、著者の人柄が感じられ魅力的だ。

東京、名古屋、九州、著者が赴く所々に出会う、多くの古書店と個性的なご店主達。彼らとの一筋縄で行かない「おつきあい」の数々は、まるごと著者自身の歴史となっている。昨今、学生の古書店離れが指摘され、私もまさにその一人であるのだが、本書をガイドブックに古書店巡りを始めよう、そんな気になる一冊である。

また、研究書や注釈書でその名を知る偉大な先師達の素顔に触れられるのも、本書の魅力の一つ。知識に血が通うようで、有り難い。

（二〇〇三年七月　講談社　A5判　二七八頁　税込二四一五円）　〔長沼　幸〕